

## 日本文学会などの思い出

中西 健治

昨年度（二〇一二）後期の「日本文学概論」は自分が今日まで辿って来た研究対象やその周辺の思い出などを纏めた冊子をもとに授業をした。高校時代の平安文学研究への憧憬の記に始まり、枕草子、源氏物語、文庫目録の作成や近世期の歌集（弄璞集）、僧侶の日記（杜陀日記）など、およそ浜松中納言物語研究と関わりの薄い作品研究のことまでの事情を足早に述べたもので、受講生には何が焦点になっているのか分かりにくい講義であったはずである。当方としては、定年を控えた一卒業生が後輩諸君へ贈る「遺言」のつもりで纏め始めたものであるだけに、つい力が別の方向に向かってしまったのかも知れない。しかしその起点はいつも日本文学会に深くあったのである。夏の最中、冊子の執筆をしながら幾多の恩師や先輩、友人、同僚、教え子などの顔が去来し、時にこみあげてくることもあった。遡れば、広小路学舎の日文共同研究室から盧山寺を眺めながら紫式部などを想うた学生時代、高校教員の勤務を終えてから衣笠の夜学生の前で文学の講義のために通ったこと、怖い先輩に研究の在り方を厳しく問われたことなどなど、思い出は尽きない。年に一回の大会をはじめ、国語教育ゼミナル大会、談話会（現、研究例会）を通じて先平方や先輩、後輩とも交流することができた。その後、伴利昭先生たちの研究集団に参加し事務的なこともしているうち、ある日、伴先生がご病気で倒れられ、後任として自分が専任教員に加えられた（二〇〇四年四月）。感激と重責感はいまだに拭い去れないでいる。伴先生の御業績を受け、本学で平安文学をより盛んにしたいとの一念で、学会誘致にも、研究発信にも、そして本学会の発展にも微力ながら邁進しようと強く決心したことであった。いま、拙著「日本文学概論」からそのあたりの該当箇所を引用してみようか。

私が急遽、その代役を務めることになった。本学の学部や大学院の授業は非常勤として担当していたが、いざ専任になってみると状況はかなり違ってきた。練習を経ずにいきなりマウンドに立った投手のようであった。それも回は終盤。緊迫した展開の試合の様相を呈しているかのように思った。ゼミ生は伴先生の指導を受けた者が多く、歴史的な事象を卒業論文の主題に選び、その指導に手こずった。大鏡や栄花物語などを正面から扱うのは初めての経験であったが、これも自分の不勉強故のことと恥入る以外になかった。しかし学生たちは自力でよく勉強し、思いがけない成果を収めて卒業してくれたし、進学もした。着任直後の学生諸君にお詫びしたい気持である。自分の課題は浜松中納言物語研究にあったが、専任になる前、リハビリ中の先生をお見舞いするたびに伴先生から伺ったことは、できるだけ平安文学の基幹に及ぶような作品を扱ってほしいということであった。それがかねてから関心を持っていた源氏物語の梗概書（十帖源氏や源氏物語忍草）を扱えば、近代の院生にも勉強にしろるかと思ひ、しばらくこれを課題とすることにした。源氏物語を近世の文人がどう読み解き、鑑賞しているかを考えることは、すぐれて時代を超える問題点をも孕んでいたし、さらには書誌学的にも関心が広がっていくように思われたのである。源氏物語忍草の写本、版本を丁寧に見ても愉しい時間であった。自分の研究課題に無理やりにも関連させなさいという私の指示を受けた院生諸君の発表やレポートは、実に見応えがあり、また魅力的であった。

（一七頁）

以下、「源氏物語千年紀」のことや源氏物語忍草研究に関する私的感慨が長々と続くのであるが、ここでは割愛せざるを得ない。

本学会には多くの先生方や先輩が営々と築いてこられた長い歴史と輝かしい実績がある。恩師である鈴木弘道先生が私にご教示くださる時、きまってお名前が出る先生に、後藤丹治、清水泰の両先生があった。私は警咳に接したことはないものの、お二人のご著書やご論考に接するたびに凜としたお姿が教室の中に浮かび上がってくるようで、な

んとも慕わしい気持ちになったものだ。本学会に集い研究と教育に専心する多くの方々の前途もかくあつてほしいと切に願うものである。

(なかにし・けんじ 本会名誉会員)